

第 1 章

湯 浅 町 の 概 要

第1章 湯浅町の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

湯浅町は、紀伊半島の北西部、県都和歌山市より20kmほど南下したところにある、面積約20.80km²の小さな町である。西には湯浅湾が広がっており、北は有田市、東は有田川町、南は広川を隔てて広川町と接している。湯浅湾は、紀伊水道にあり、有田市の宮崎の鼻から由良町の白崎までの間の海域を指す。湾内には鷹島や黒島といった島々があり、湯浅町域には毛無島・^{かるも}荻藻^{じま}島が所在する。

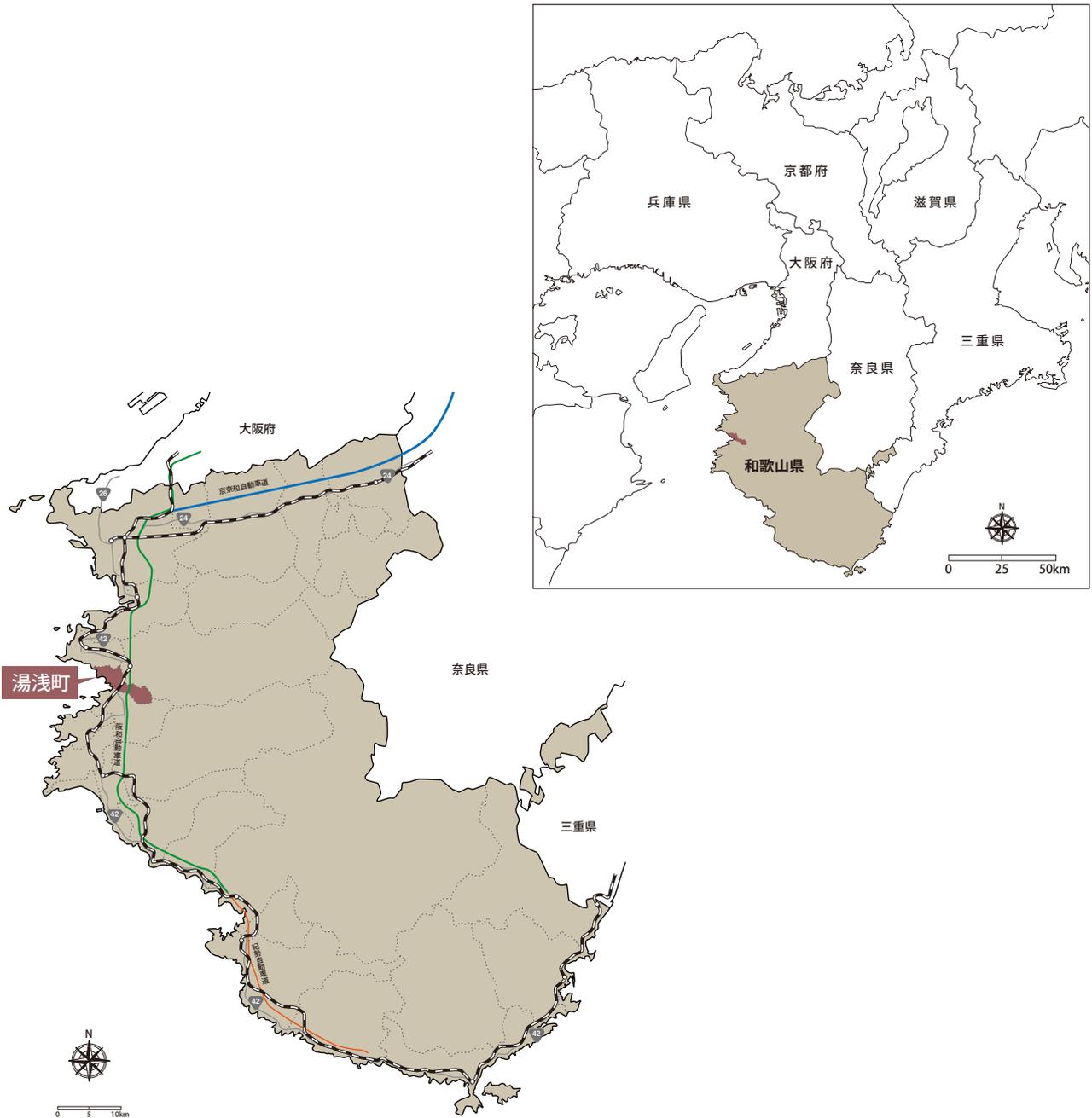


図4 湯浅町およびその周辺地域の位置図

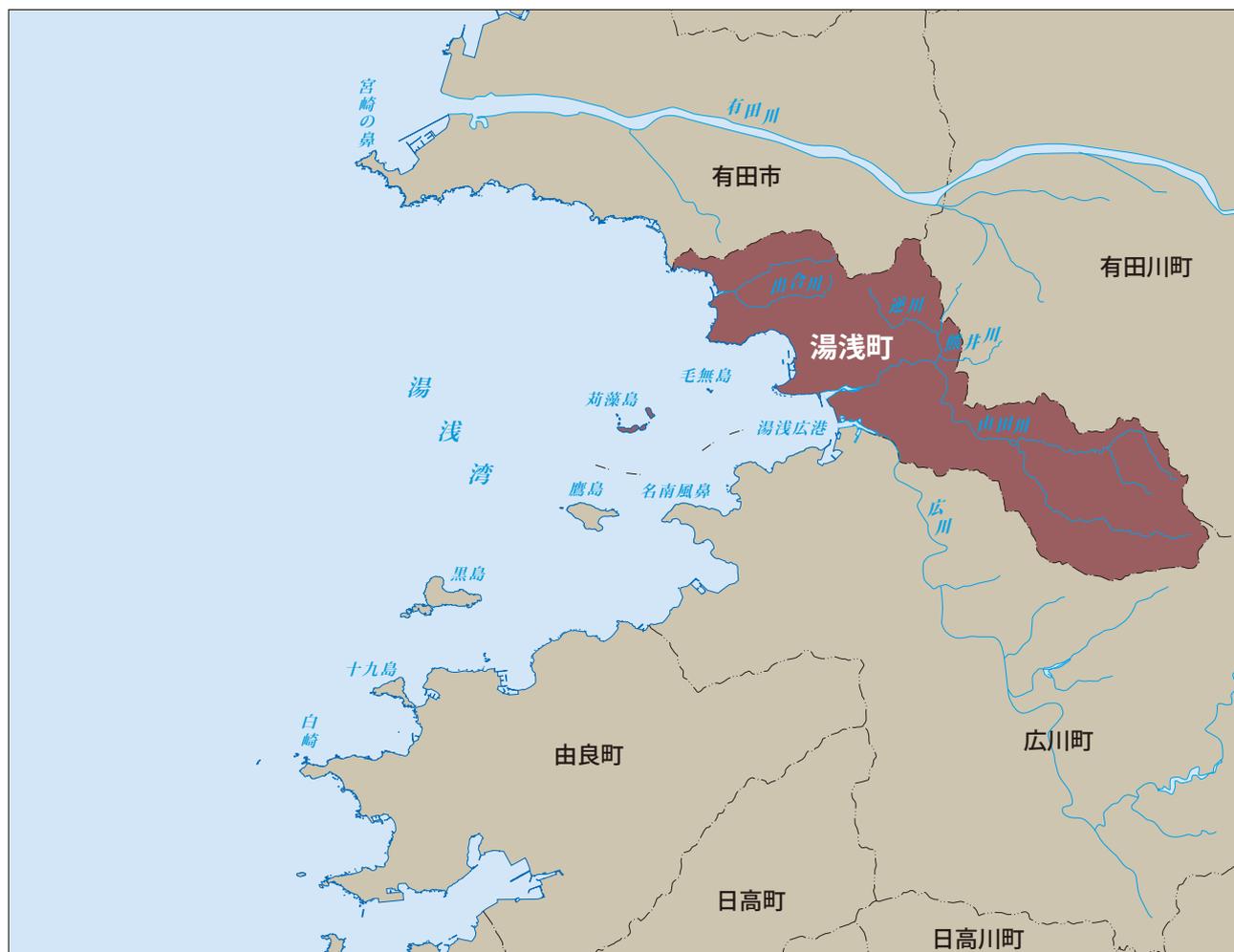


図5 湯浅町全体図

(2) 地勢・地質

町域は、東西方向 6.5km、南北方向 3.5km に広がっており、東部及び北部は丘陵山岳部に、中央部は平野部となっている。

町を流れる河川は、三本松峰を源流とし町の中央部に流れ出る山田川水系と、広川町の白馬山脈から流れ出て、湯浅町と広川町の境から湯浅湾に出る広川がある。山田川は、延長約 6.5km と短い河川で、熊井川や逆川といった支流と合流しながら湯浅湾に向かって流れる。中央部に広がる平野部は、この山田川が作った扇状地と沖積平野である。なお、河口部分は昭和 40～50 年頃に埋め立てが行われており、人工地形となっている。また、北半では、中山丘陵の西端となっており、東西に尾根が通っており、沿岸部に小規模な集落が形成されている。

地質については、ジュラ紀の付加体からなる地層、及びそれに重なる白亜紀の地層からなる。白亜紀の地層は主に前期白亜紀のものであるが、南東部の山田付近には後期白亜紀の地層も分布している。前期白亜紀の地層のうち、汽水域で形成されたと推定される湯浅層は湯浅地区と栖原地区に細く分布するとともに、広川町の白木海岸等でも見られる地層である。最近では、恐竜の歯の化石の産出が確認されている。湯浅町から有田市、有田川町西部にかけて広く分布する有田層は、湯浅層の上に重なる地層で、やや沖合の海底で形成された地層であると考えられている。

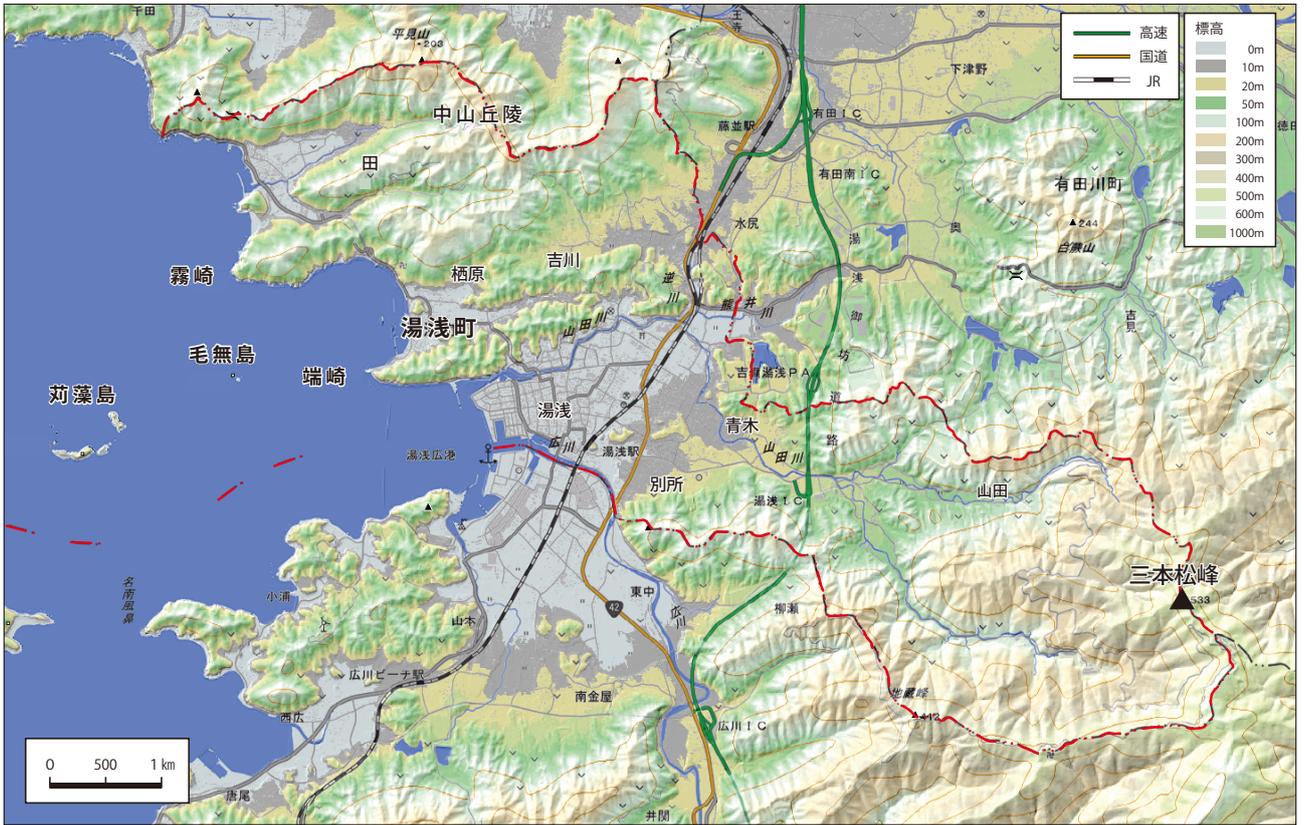
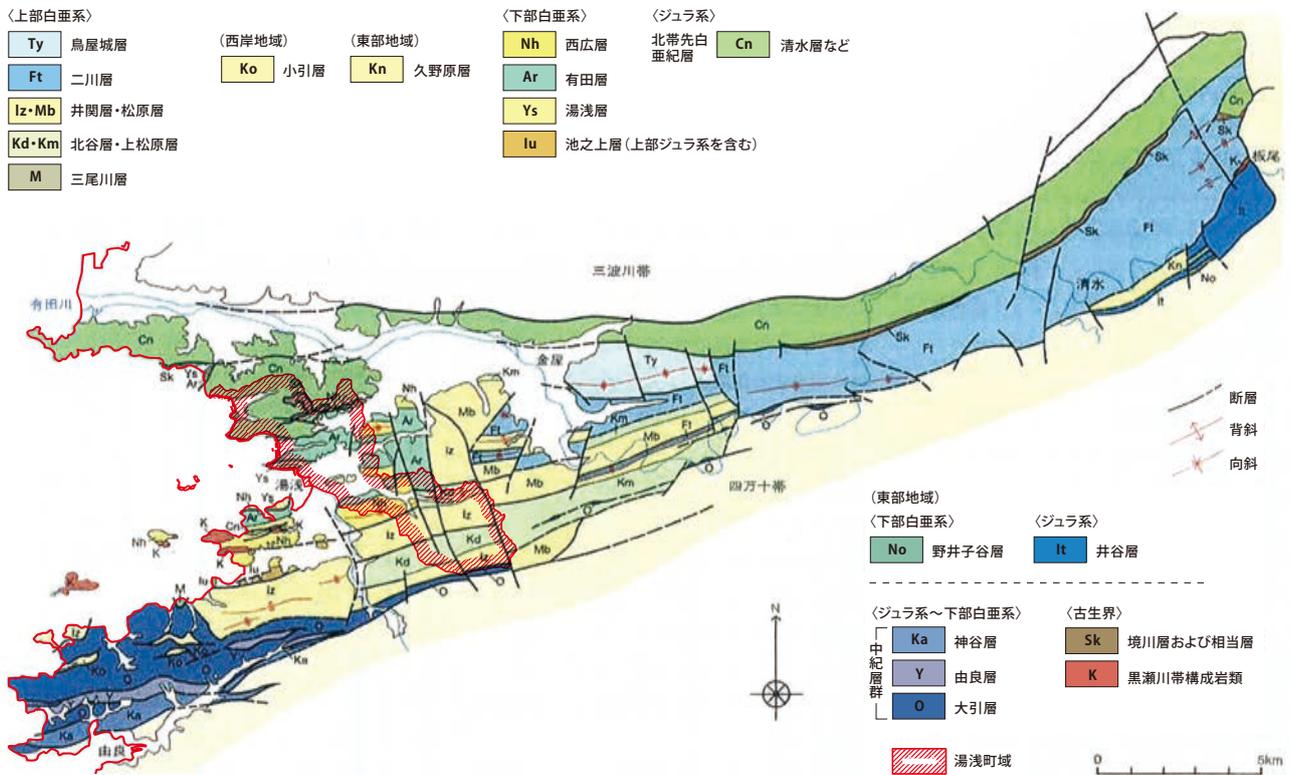


図6 湯浅町の地勢図



(吉松敏隆著、「紀伊半島の地質3 秩父帯」紀伊半島西部地域の秩父帯地質概略図 一部改変、アーバンクボタ 38号、1998年)

図7 地質概略図

(3) 気候

本町の気候は、瀬戸内気候区と南海気候区のほぼ中間で温帯に属する位置にある。湯浅町における気候に関する観測は、町内に設置されている湯浅観測所の降水量の観測のみとなるため、その他の情報は和歌山地方气象台（和歌山市）の観測情報を採用する。平年値（1991～2020年の平均値）でみると、6～7月と9月に降水量のピークがあり、梅雨や台風の影響による降水が多いことがわかる。対して冬期は降水量が少なく、積雪になることは稀である。月別の平均気温では、8月の28.4℃が最も高く、最も低いのは1月の6.2℃であり、年間を通じて温暖な気候であることがわかる。令和2年（2020）では、0℃未満の気温を観測した日が2日のみ（和歌山地方气象台）であり、積雪等の影響を受けることは稀である。

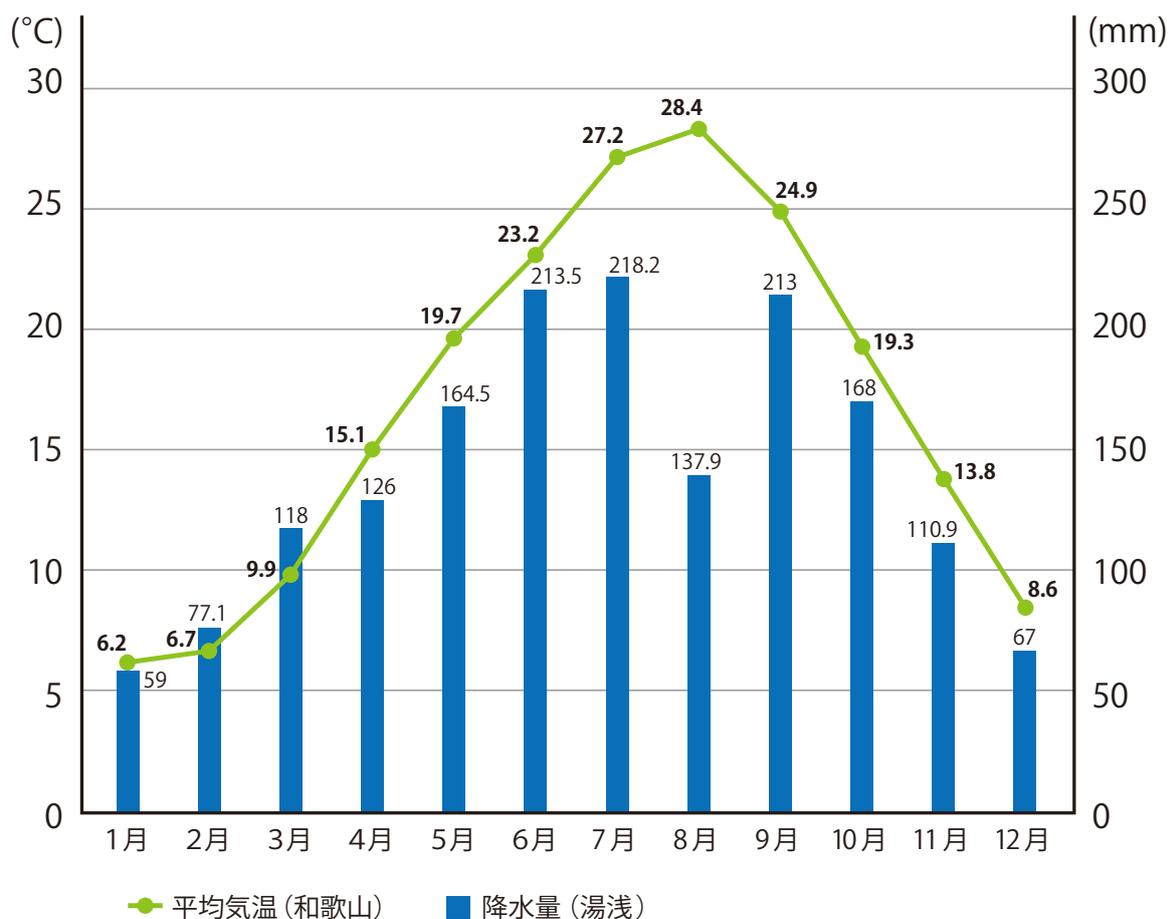


図8 気温・降水量のグラフ（出典 気象庁 1991～2020年の平年値）

2. 社会的状況

(1) 行政区域の変遷

江戸時代には、現在の湯浅町域は湯浅荘と呼ばれ、山田村、青木村、別所村、湯浅村、栖原村、田村、吉川村の7ヵ村（現在の大字に引き継がれている）が存在した。このうち、山田村は、紀州藩の支藩である田辺藩の管轄下にあった。廃藩置県の際、一時は田辺県が存在していたがまもなく和歌山県に統合され、その後、明治22年（1889）の市町村制の実施により、湯浅、別所、青木、山田の4ヵ村が合併し湯浅村に、栖原、田、吉川の3ヵ村が合併して田栖川村となり、明治29年（1896）には湯浅村が町制を施行し湯浅町となった。さらに、昭和31年（1956）には田栖川村が湯浅町に合併して、現在の行政区域の基礎が確立された。なお、いわゆる平成の大合併（※1）の際には、町域の変更がなかった。

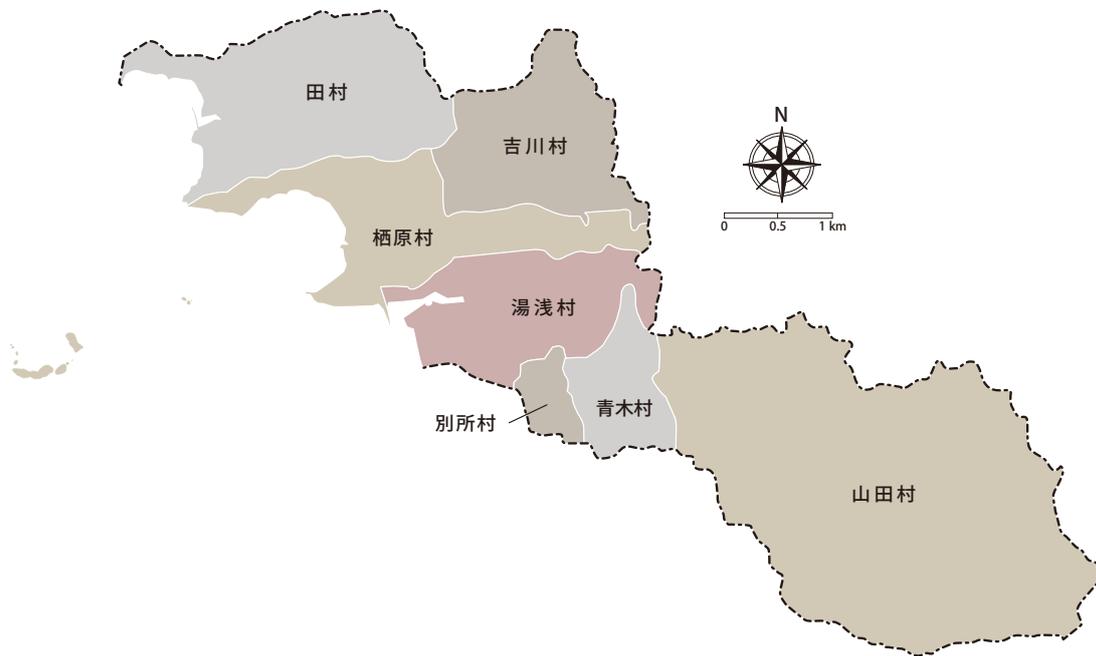


図9 明治の合併前の行政区域

【合併の変遷表】

明治22年(1889)以前	明治22年(1889)の市町村制の実施	明治29年(1896)	昭和31年(1956)～
山田村	湯浅村	湯浅町	湯浅町
青木村			
別所村			
湯浅村			
栖原村	田栖川村		
田村			
吉川村			

※1 平成の大合併

地方分権一括法による合併特例法の改正によって、平成11年（1999）から平成22年（2010）にかけて、多くの自治体の合併が行われた。有田郡では、平成18年（2006）に吉備町、金屋町、清水町が合併し、有田川町となった。

(2) 人口

湯浅町の人口は、戦後しばらく 17,000 人前後を横ばいで推移してきた。しかしながら、昭和 60 年（1985）の 17,171 人をピークに著しく減少し、平成 27 年（2015）には、12,200 人となっている。平成 17 年（2005）から平成 22 年（2010）までの人口減少率は 10.4% と非常に大きいものであった。さらに、国立社会保障・人口問題研究所が平成 30 年（2018）に公表した今後の湯浅町の人口推計によると、2040 年には 7,235 人まで減少すると見込まれている。

年齢 3 階級別人口の割合をみると、平成 27 年（2015）の結果では老年人口の割合が 32.9%、年少人口が 11.8% であり、老年人口が増加している。全国の老年人口割合は 26.6%、和歌山県全体では 30.9% となっており、湯浅町における高齢化割合が高いことがわかる。人口推計による今後の見込みでは、2040 年には、湯浅町の高齢化割合は 45.2% となると予想されており、高齢者の生活を支える生産年齢人口とほぼ同じ人数に並ぶと予想されている。

なお、居住人口の著しい減少や少子高齢化の状況等により、平成 26 年（2014）4 月に国から過疎地域の指定を受けた。

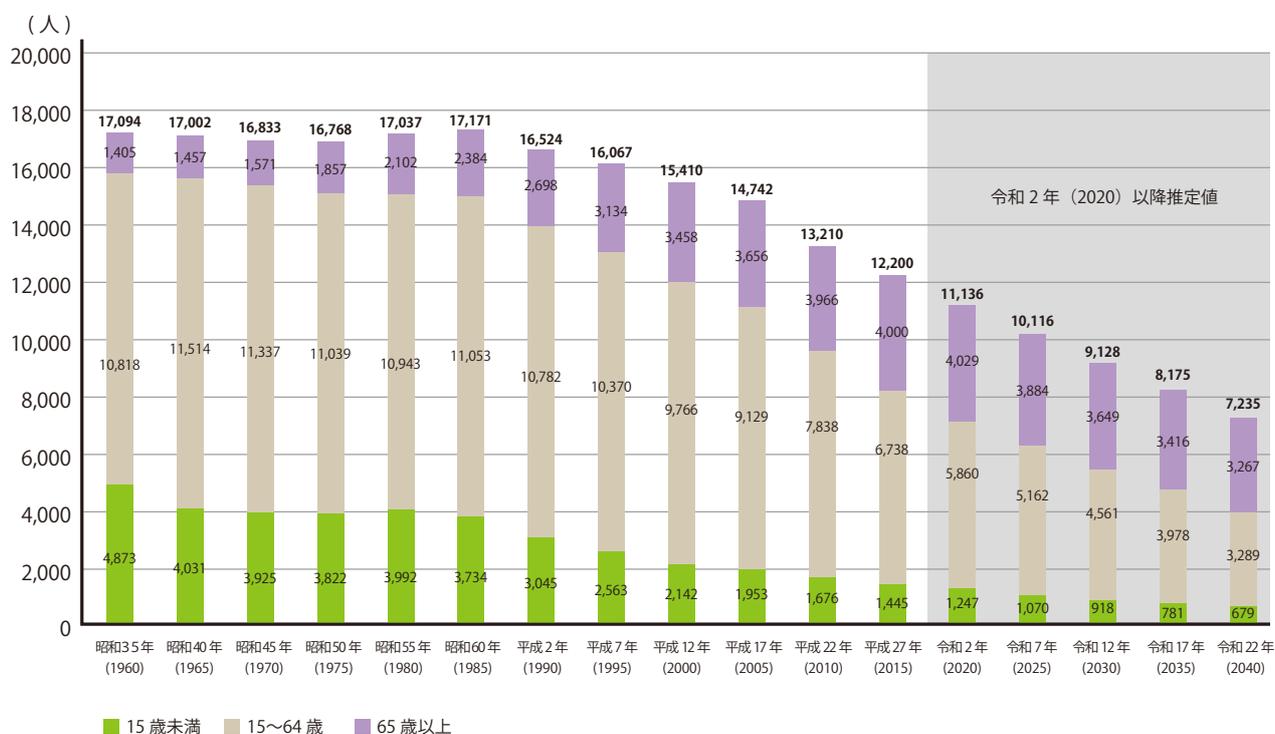


図 10 総人口と年齢階層別人口の推移 ※各年齢層別割合は不詳人口を除いた人口で算出
 (～平成 27 年 国勢調査 / 令和 2 年以降推定値は国立社会保障・人口問題研究所調査「日本の地域別将来推計人口」より)

(3) 土地の利用状況と空き家

湯浅町は、約7割が山地丘陵部で、平野部は3割程度となっている。南北に横断する国道42号、紀勢本線湯浅駅を中心とした平野部に市街地が形成されており、湯浅、別所、青木及び栖原地区に都市計画区域（638ha）が指定されている。農地は周辺丘陵部、傾斜地に樹園地が開け、概ね国道42号以西、1,940haが農業振興地域に指定されている。

昭和40～50年代にかけて、市街地西方の海浜が埋め立てられ大規模な開発が進められた。この前後には、国道42号線の整備や、広川河口の那耆大橋の開通、そして昭和59年（1984）の海南湯浅道路（海南－吉備間）の建設等により、郊外地の開発が進んでいった。近年では、平成6年（1994）に建設された湯浅御坊道路の湯浅インターチェンジ（和歌山市方面のみのハーフインターチェンジ）が町東部の山田地区に置かれたほか、平成27年（2015）には、湯浅町役場庁舎が青木地区の高台に移転するなど、近年では国道以東で宅地開発が進んでいる状況である。

紀勢本線湯浅駅周辺では、令和2年（2020）に、図書館や観光交流センター等が入る湯浅えき蔵が建設され、駅周辺の再整備が行われているところである。

空き家は、町域全体に広く分布しており、少子高齢化や核家族化の状況を踏まえると、今後さらに増加していくことが予想される。平成29年度には空き家実態調査が行われ、調査対象となった851件の空き家（判定不明のものを含む）のうち、約10%の空き家は老朽度が高く危険な可能性が高いものと判断された。これを受けて、平成30年度には湯浅町老朽危険空家除却補助金が準備され、平成31年度には24件の老朽危険空家が除却されている。

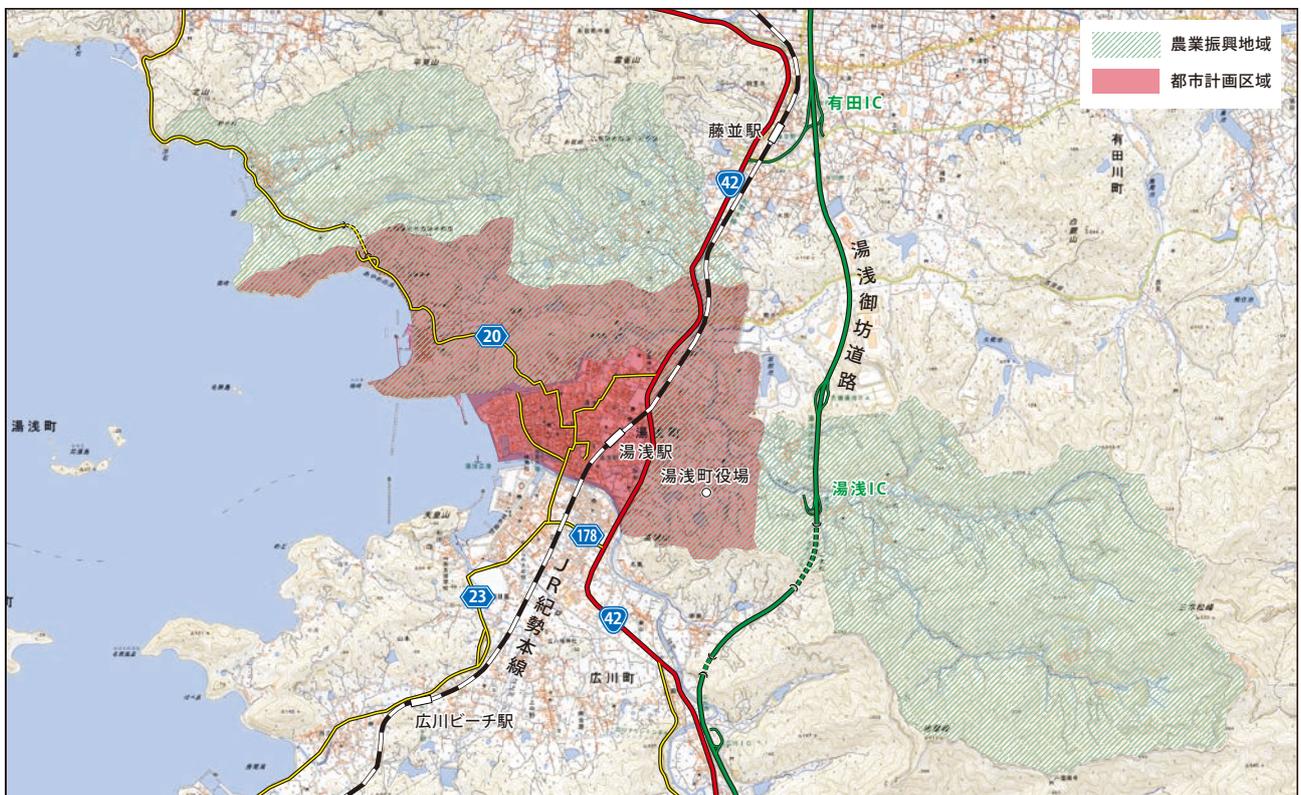
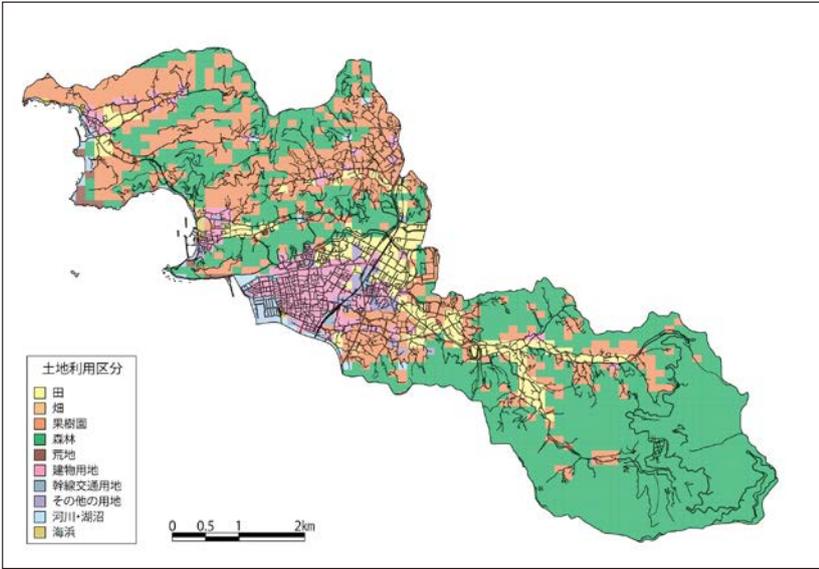
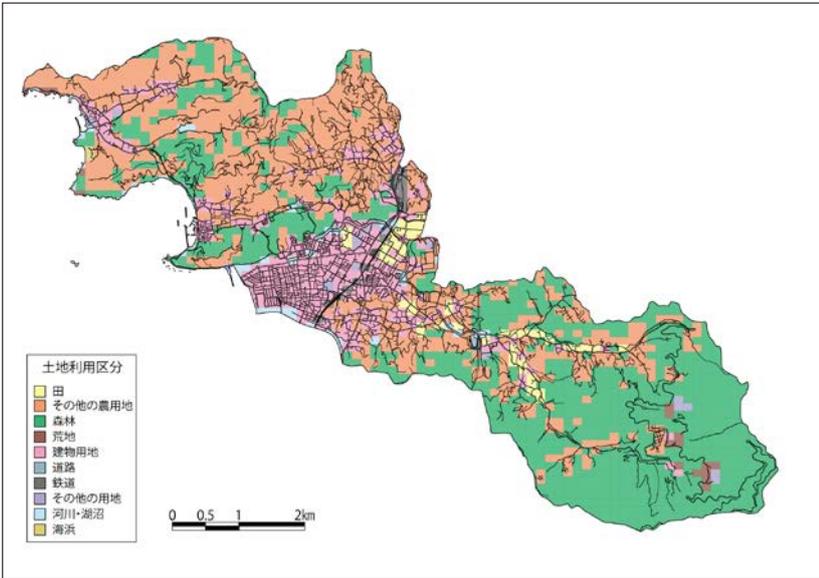


図11 都市計画区域と農業振興区域の状況



昭和51年(1976)土地利用細分メッシュデータ使用(100mメッシュ)
国土数値情報(国土交通省)引用



平成28年(2016)土地利用細分メッシュデータ使用(100mメッシュ)
国土数値情報(国土交通省)引用

図12 土地利用の変遷(昭和51年・平成28年)

(4) 産業

①産業別就業人口

平成27年の国勢調査によると、湯浅町の就業人口は5,792人となっている。産業別(※2)に見ると、第3次産業の割合が近隣市町に比しても高く60%を超えている。サービス業や公共関係の就業者数が地域の中で多いということは、地域の中心地としての役割が今もなお高いことを示している。また、醤油や金山寺味噌をはじめとした製造業が分類される第2次産業については近隣と同程度の23%となっており、かつて醸造業を中心に商工業が盛んであったものの、現代の経済をけん引する産業とはなっていないことがわかる。

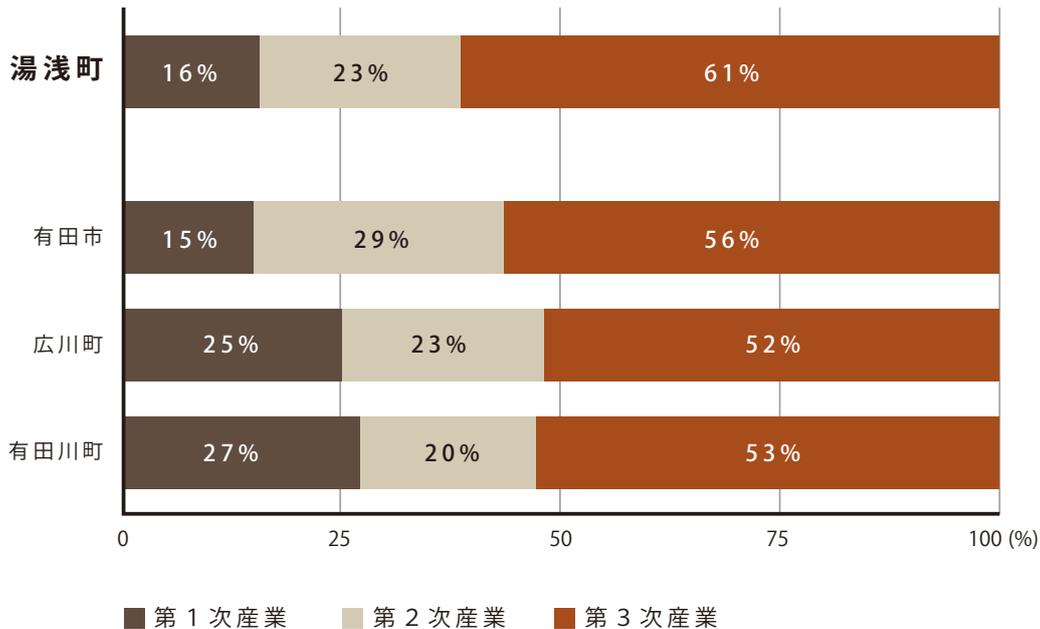


図13 産業別人口の割合(有田地方)(出典 平成27年国勢調査)

②農業

本町の農業従事者数は減少傾向にあるが、みかんを中心とした農業をめぐる状況に劇的な変化があると言えるほどではない。湯浅町における農業は、果樹栽培が主体なのが大きな特徴となっている。作付面積のうち、9割以上を樹園地が占め、稲作や果樹以外の畑地は非常に少ない。和歌山県や全国の平均値を見ても、湯浅町の農業のほとんどが樹園地におけるものであることが明らかである。果樹栽培は、有田みかんの産地である有田地方にあることから、みかん等の柑橘類が大半を占める。町域が狭小であることを踏まえると県内でも有数のみかんの産地であるといえる。令和3年(2021)には、「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」が日本農業遺産に認定され、有田みかんのブランド化が進んでいる。

※2 産業別

日本標準産業分類の大分類において、産業は第1次から第3次までの3つに大別される。第1次産業は農林水産業などを指す。第2次産業は鉱工業などを、第3次産業は商業や公共、その他のサービス業を指す。

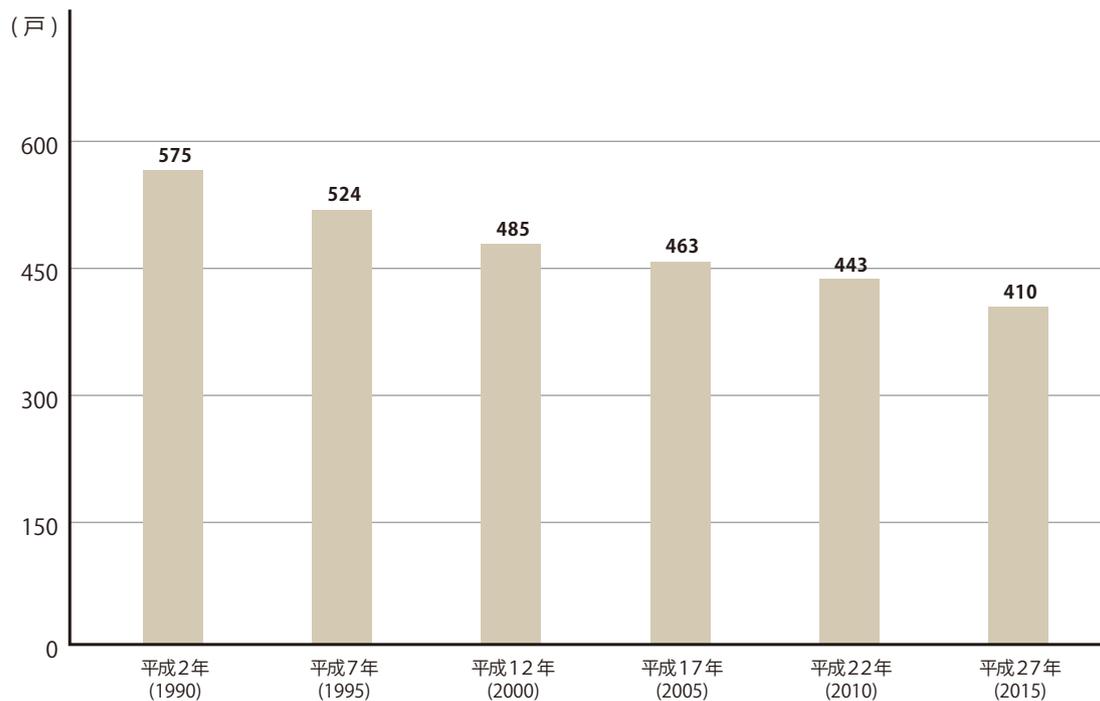


図14 湯浅町の総農家数の推移 (出典 農林水産省 農林業センサス)

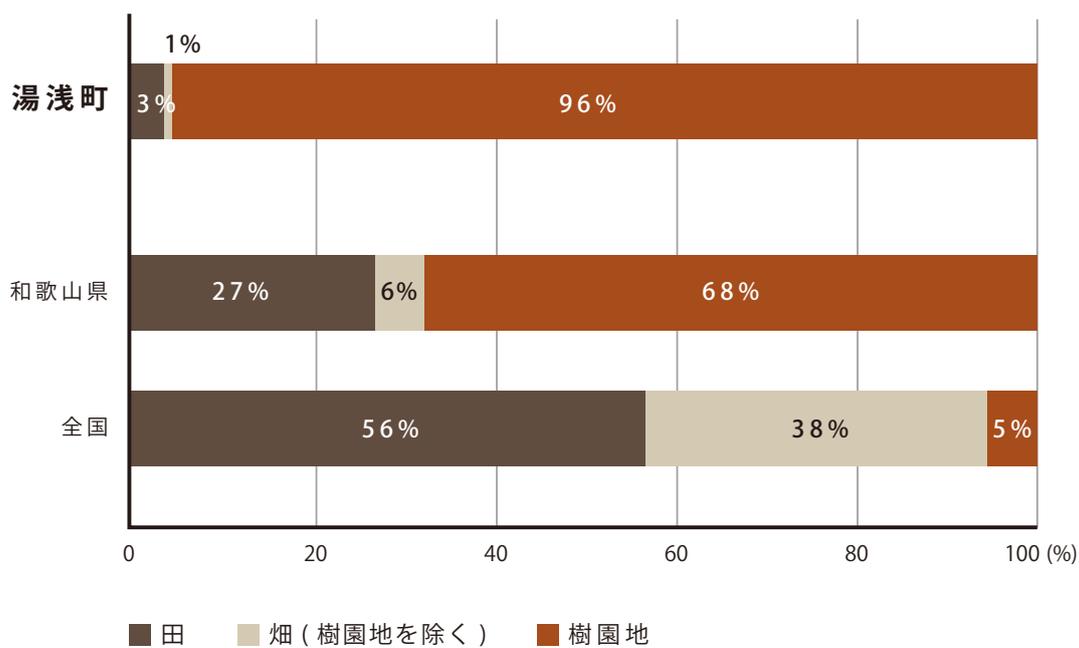


図15 経営耕地面積の比較 (出典 平成27年農林業センサス)

③漁業

本町は、紀伊水道に開ける湯浅湾に面し、古くから漁業が盛んであったところで、江戸時代には紀州藩随一の漁業地であったとも言われているが、近年では、水産資源の減少とともに、従事者の高齢化や後継者不足、水産物の価格低迷などの影響を受け、非常に厳しい経営状況となっている。平成15年（2003）に1,415tあった漁獲量は、平成30年（2018）には637tと6割ほどの減となっている。湯浅町における漁獲量を魚種別にみると、シラスの漁獲量が全体の半数以上を占めている。なお、広川河口で行われているシロウオ漁については、地域で消費する程度の量しか獲れない。

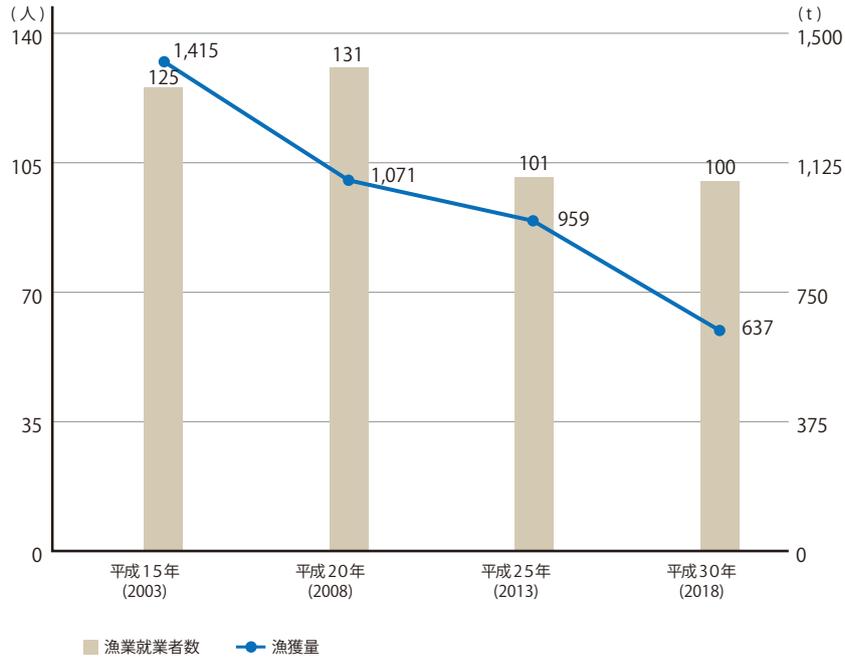


図16 湯浅町の漁業就業者数と漁獲量の推移（出典 農林水産省 漁業センサス）

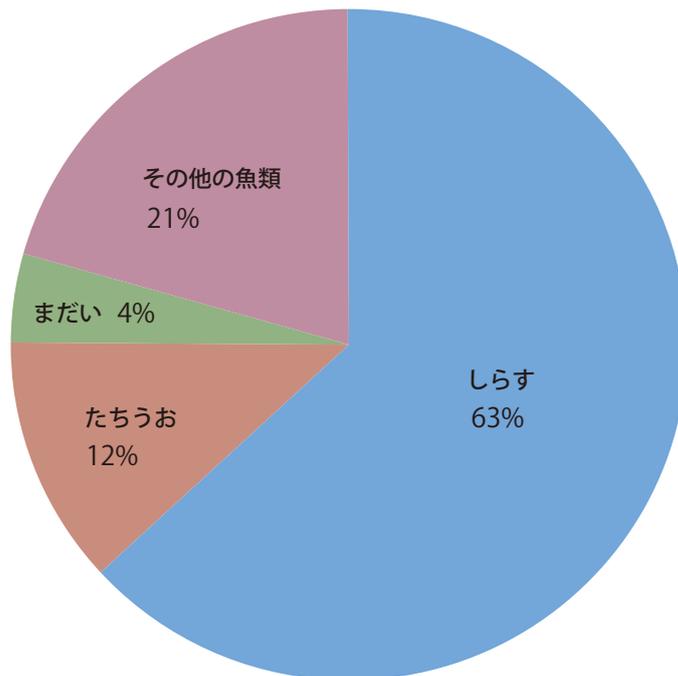


図17 湯浅町の魚種別漁獲量（出典 平成30年農林水産統計）

④観光

湯浅町は、西有田県立自然公園に指定された景観の優れた海岸、有田みかんの段々畑などの豊かな自然がある。また、金山寺味噌、三宝柑、シラスや干物などの特産物もこの地域の名産として観光客に人気が高い。さらに、醤油の醸造町としての雰囲気伝える歴史的な町並みといった豊富な観光資源を有しており、自然と歴史に彩られた町を訪れる観光客数は年々増加してきている。日本遺産にも認定されたこともあり、今後も観光客の増加が期待される。

湯浅町への観光入込客数（和歌山県観光客動態調査）は、重伝建選定前後の平成18年（2006）には約34万人と、およそ30万人前後で推移していたが、その後増加傾向にあり、令和元年（2019）には約54万人となっている。来訪する外国人観光客もここ数年で急激に増加している。伝建地区にある公開施設の甚風呂入館者数では、平成28年（2016）では391人であったものが、令和元年（2019）には1,307人となっている。世界遺産である高野・熊野に近いこと、関西国際空港からのアクセスが比較的容易であること等が要因として考えられる。

令和2年（2020）以降、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、外国人観光客はほぼ皆無となり、バスを利用した団体旅行客も大きく減っているものの、国内の個人旅行客は引き続き観光に訪れている状況である。

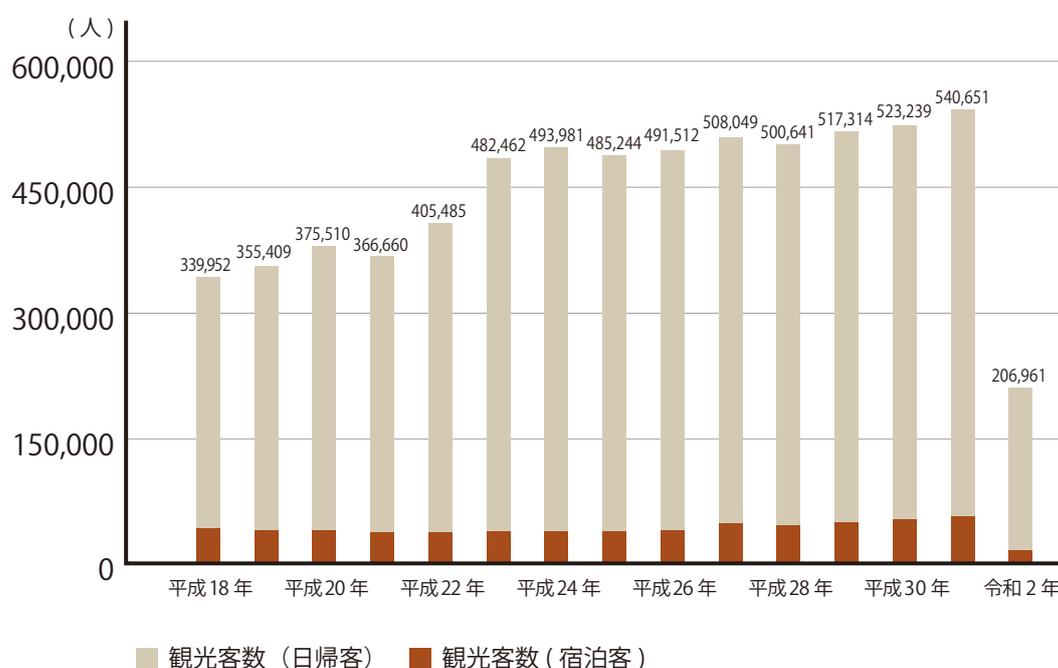


図18 湯浅町の観光客の推移（出典 和歌山県観光客動態調査）

【甚風呂入館者数】

	甚風呂入館者	甚風呂外国人
平成28年（2016）	14,863	391
平成29年（2017）	16,082	611
平成30年（2018）	30,631	1,139
平成31年 / 令和元年（2019）	28,395	1,307
令和2年（2020）	13,169	105

3. 歴史的背景

〈古代以前〉

湯浅には少なくとも弥生時代には人が住んでいたと考えられている。湯浅湾に面しているこの地域は、今よりも海岸線が山に入り込み、遠浅の海、あるいは湿地状態の地域が広がっていたと思われる。湯浅の地名は、古名「温笠（ゆかさ）」から転じたという説のほか、水（ゆ）が浅く広がっていたから、とも言われている。弥生時代の遺跡である青木Ⅱ遺跡や山田堂山遺跡が、東部の山間に位置していることからこのことがわかる。

湯浅には、この周辺では最大規模の円墳である天神山古墳があった。築造時期は、5世紀後半から6世紀前半と考えられており、この時期には、湯浅がある程度の力を持った地方豪族の拠点として成り立っていたことを想像させる。

万葉集の頃には、この辺りでは海を使った人々の往来があったようである。万葉集を読み解くと、都から南に向かう人々は、湯浅には陸上交通を使って入り、白上の磯しらかみから海に出て白崎方面に向かった（※1）と推察されている。

また、延長5年（927）にまとめられた『延喜式』に「温笠駅馬八疋」との記載があり、温笠を湯浅の古名とする説を採用して一時期に南海道の宿駅が置かれていたと考える説もある。湯浅の人々と海との繋がりや、その後の歴史にも密接に関わってくることになる。

平安時代後期になると、「湯浅」という地名が熊野詣の道中を記した日記等の文献上に登場するようになる。熊野の聖域の入口として熊野古道（※2）の中でも重要視されていた藤白王子ふじしろおうじ（海南市）を出発した一行は、次の宿泊地として次第に湯浅を選択するようになっていく。背景には、中世に強大な勢力を誇り地域を支配した湯浅党むねしげの実質的始祖、湯浅宗重（1118～95）の登場と、その活躍がある。

〈中世〉

湯浅宗重は、平家から、そしてその後の鎌倉幕府からも有力御家人として認められ、この地方



写真1 湯浅湾



写真2 熊野古道からの眺望

※1 白上の磯から海に出て白崎方面に向かった
「由良の崎潮干にけらし白上の磯の浦廻をあへて漕ぐなり」等から。第7章第1話参照。

※2 熊野古道
熊野古道という呼称は、広く熊野参詣のために利用された道全般をさす。文化財としては熊野参詣道とも表現する。また、中辺路や大辺路、伊勢路といった細分した表現もあり、湯浅町を通る部分は紀伊路ということになる。近世には、熊野街道としても利用された。本計画では、湯浅町民がもっとも慣れ親しんでいる表現として、熊野古道という呼称を用いる。

を統治し、湯浅発展の基礎を築いた。同時に、拠点である湯浅では、湯浅城といった軍事拠点だけでなく、彼らの館や信仰する寺社等が整えられていくことにより、熊野詣の途上における宿場的な役割を担うことになる。宗重以降、湯浅一族による武士団湯浅党は、中世の紀伊半島に広く勢力を誇った。また、一族からは有名な華厳宗の僧、明恵上人^{みょうえしやうにん}を輩出するなど、仏教界とも繋がりを持ち、これらは中央の華やかな文化を湯浅にもたらすこととなった。



写真3 醤油醸造

醤油が誕生したのもこの頃である。醤油は13世紀中頃、宋に渡った覚心^{かくしん}（法燈国師^{ほつとうこくし}）が修行先の径山寺^{きんざんじ}で学んだ夏野菜を漬け込んだ味噌の製法を伝えたのがきっかけとされている。この味噌が湯浅の町で作られる中で、発生する液汁に注目した湯浅の人々が改良をして作り上げたのが、醤油のはじまりだと言われている。はじめは自家用程度の製造であったと思われるが、次第に商品として作られ、海運を利用して出荷されるようになっていく。このことは、湯浅にさらに発展をもたらした。

湯浅党は、南北朝時代になってその力を失っていき、畠山氏^{しらかし}や白檜氏といった統治者がこの周辺を治めた。一方で、町としての発展はめざましく、天正年間（1573～93）までには中町や浜町といった旧市街地の大半が町立てされたといわれている。

〈近世〉

江戸時代に入ると、徳川御三家の一つ紀州徳川家の紀州藩により統治されることとなった。湯浅には代官所や街道沿いに設置された伝馬所、水運における課税が目的の二歩口役所等^{にぶぐちやくしょ}が置かれ、この地方における行政の中心地となっていく。

時代が変わっても熊野信仰は変わることがなく、庶民にも熊野詣が広がっていったことにより、多くの人々が行き交った。また、那智山青岸渡寺^{せいがんとし}を1番札所とした西国三十三所巡礼も、近世には庶民の間に広く人気であったが、彼らもこの近辺では熊野古道を利用して巡礼をしたため、旅人や、彼らを相手に商売する人々で賑わった。

江戸時代は様々な産業がより一層発展した時期でもある。紀州藩の保護を受けた醤油醸造は繁栄し、多くの醤油醸造家が軒を連ねた商工業都市へと発展した。作られた醤油は、海運により各地へ移出された。また、漁業も盛んに行われていた。遠洋漁業で財をなし、江戸等で成功した商人も輩出した。漁業で使用する漁網製造も、湯浅の一大産業であった。湯浅村では、天保10年（1839）の『紀伊続風土記』によると人口が5,546人と紀州藩で最大規模の人口を有しており、「一郡の都会繁昌の地なり」とも記されている。

このような人々の往来と、人口の集積は、文化の面でも新たな広がりを見せ始めた。江戸時代は知識人たちによる文化的な活動が盛んであったが、湯浅でも『古碧吟社』^{こへきぎんしゃ}という文芸サロンが開かれ、この地方の知識人が集まり漢詩が盛んに詠み交わされていた。漢詩だけでなく俳諧や絵画等といった芸術も嗜まれており、湯浅における文化的な豊かさを表している。

〈近代以降〉

明治4年（1871）の廃藩置県により和歌山県が誕生、地方行政の中心として有田郡民政局（のちに有田郡役所）が湯浅におかれた。近代行政における官公庁の設置、鉄道や幹線道路の開通など、引き続き有田地方の行政・商業の中心都市として、繁栄をした。特に、昭和2年（1927）の国鉄紀伊湯浅駅（現・JR湯浅駅）の開通は、旧市街地の東側にあらたな市街地が形成され、官公庁などの公的機関の移転や繁華街の形成など、町の姿を変化させた。

第二次世界大戦において、湯浅町では本格的な空襲を受けることがなかった。壊滅的な被害を受けるような災害が記録に残される範囲で受けていない、ということとあわせて、結果的に古い町並みや文化遺産が多く残されたことに繋がる。昭和31年（1956）、湯浅町と田栖川村^{たすかわ}の合併により、現在の湯浅町となった。戦後の高度成長とモータリゼーションの普及により、旧市街地の東方に国道42号のバイパスが完成した。さらに昭和59年（1984）の海南湯浅道路（現在の阪和自動車道）、平成6年（1994）の湯浅御坊道路（吉備－広川）の開通により、全国の高速道路網と繋がった。幹線道路が旧市街地の東方にできたことで、さらに市街地は東方へと広がりを見せている。平成27年（2015）には、湯浅町役場庁舎が、湯浅駅前から国道42号より東の高台に移転し、近年ではさらに東側の住宅地化が進んできている状況である。



写真4 湯浅町役場庁舎